

祖母と神様

+ 文 岩本耕太郎 Text by Kotaro Iwamoto +

そういえば祖母はプロテスタントの宣教師だった。

祖母の記憶といえは申し訳ないほど少ししかないが、いつも「坊のことを神様にお願しておくから」と話していた。目をつぶって話し始めると目の前に僕がいようがいまいが気にしてない。いつもこっそり抜け出して遊びに行ってしまうって祖母は暫く気がつかずに説教を続けてくれた。今思うと申し訳ない思いである。

そのころ祖母は町田で伯父夫妻と一緒に住んでいた。元々は別のところに小原國芳先生が成城学園から玉川学園に移った時に、小原先生の教育方針に傾倒していた祖父は家族共々町田に引越し、父を玉川学園に通わせたのである。

父には姉二人と兄がおり、父は末っ子であった。伯父夫妻に子供ができなかったので次男である父の息子の自分が岩本家の跡取りなのだ。

祖母の影響か両親はプロテスタントとして洗礼をうけているのだが、あんなに祖母に心配をかけていた私自身は洗礼を受けていない。両親も不思議なくらい子どもたちへの宗教の強要はし

なかった。

隠れキリシタンならば十字架やキリシタン名など、何か徴があるのではないかと探し回ったが、残念ながら墓石からはそれらしいものは何も見つからなかった。仕方がないので刻まれている家紋を撮影して帰路についた。

墓石に刻まれていた家紋は茗荷が下から上に向かって円を描いており、俗に「抱き茗荷」といわれるものだ。家紋辞典で抱き茗荷の意味を調べてみると不思議なことにインド系の神様「摩多羅神」(マタラジンあるいはマタラシンと読む)を奉る一族となっている。

摩多羅神とはそもそも天台宗の慈覚大師円仁(794-864)が唐で引声念仏を学んで帰国する船に乗っているときに現れたといわれている。「吾は障礙神である。吾を祀らなければ往生の願いは達せられないだろう」と告げられ、帰朝した円仁は比叡山の常行堂にこの神を勧請し、阿弥陀信仰を始めたという。摩多羅神は本尊仏である阿弥陀仏の裏側、堂の後戸に控える存在として祀られたことから「後戸の神」と称された。今で言うところの「黒幕」だろうか。

「摩多羅神」は京都三大奇祭の一つと

いわれる「牛祭」に登場する。現在は広隆寺が取り扱っているが元々は広隆寺の境内にあった「大酒神社」が仕切っていたお祭りである。10月に行われているが決まった日ではなく直前までその日程は知られることなく、突然に始まる。なんとも奇妙な牛のお面をかぶった神様が突然現れて町中を舞い歩き突然に終わる。その意味するところは全く不明である。お面をつけるところからお能との関連もいわれている。

profile

帝国クリニック院長

1959年生まれ。幼少期をボストンで過ごす。

山形大学医学部卒。米国イリノイ州立大学で分子生物学を研究、1993年より現職。

サーフィンとクラシックカーをこよなく愛し、4世代7人家族。著書に『患者さまが増える』(H&I出版)、『エグゼクティブが実践するたった一つの健康法』(中経出版)

